

保育者養成校における教育用アプリ分析の授業実践および ICT 活用に対する学生の認識

Consideration of a Lesson of Analyzing Educational Apps in a Childcare Worker Training School and Recognition of ICT Utilization by Students

阿部 学

ABE Manabu

本間 優子

HONMA Yuko

要旨 本研究ノートは、筆者らが保育者養成校にて行った教育用アプリ分析の授業に関して、その授業づくりの背景や意図、実践前後の学生の認識などを記録に留めることを目的としたものである。授業では主に、2つの企業が開発するアプリが教育や保育の現場でどう活用できるかを検討する活動を行った。授業の様子や学生のコメントから考察する限りでは、本授業の妥当性は概ね示されたが、今後も継続的な授業づくりの試みが必要である。

1. 背景

堀田ら（2018）は、「幼児期における教育の重要性の認識がますます高まる中で、「幼児教育におけるメディア活用」が、現代の教育転換に大きく遅れている」ことや、「保育現場では、テレビやゲーム、スマホやタブレット端末というだけで、遊びや学びを阻害する要因と捉える風潮が未だに強い」ことを指摘している（p.205）。

この指摘は2018年段階のものであるが、幼児教育・保育（以下、筆者の記述は「保育」に統一）に関する分野においては、かねてより、新しいメディア、ICTといったものを取り入れることについて否定的であったり消極的であったりする面がある。たとえば小林（2006）は、子どもたちがメディアの影響を受ける状況を「身体性を剥奪され操作される中で日常を生きている」（p.32）と捉えており、「メディア時代といわれる現在、子ども・保護者・保育者に、希薄化する「生の実感」を取り戻そう」（p.148）と主張している。森田（2008）は、幼稚園教員養成課程の学生を対象にメディアについての関心や幼児教育での利用についての意識を調査している。そこでは、「現代の学生であれば、幼少期より様々な情報メディアに囲まれて育ってきていることから、年齢が高い世代と比較して、不安や抵抗感は少ないであろう」と予測されながらも、「生育歴や学習経験によっては、不快もしくは苦手と覚えることにもなる」という結果であったことが報告されている（p.210）。小平（2016）は、「近年は、幼稚園や保育所でも ICT 環境が整い始めたが、小学校以上のように、国の「教育の情報化」計画に組み込まれていないこともあり、保育への新規メディアの導入には慎重な傾向がみられる」（p.14）と制度面の課題に言及している。

しかし、現代を生きる私たちにとって ICT はもはや切っても切り離せないものになっている。特に子どもたちは、私たち大人よりもさらに自然に ICT に触れて育っていくだろう。

ベネッセ教育総合研究所（2017）の調査からは、子どもたちが乳幼児の段階からスマー

トフォンなどに日常的に触れるようになってきていることが分かる。本調査では、乳幼児（0歳後半～6歳）の21.2%がスマートフォンに「ほとんど毎日」触れていることが示されている。なお、同研究所による2013年の調査結果は11.6%であり、倍増している。また、使用時間は1日「15分未満」が70.2%と大多数ではあるが、1時間以上の使用は12.8%であり、そのうち「3時間くらい」が1.4%、「4時間以上」が1.3%である。用途の上位は、「写真を見せる」「あなたやお子さまが撮った動画を見せる」「YouTubeなどで検索やダウンロードした動画を見せる」である。子どもとメディアの親密さがうかがえる。かつては子どもたちが情報を得る場所やツールは限られていたが、今は時空を越えて情報を受け取れるようになった。おそらく、子どもたちは受け取った情報から何かしらの影響を受け、そのことを保育の場でも表現してくるだろう。こうした実態について、保育者は留意しておく必要があるだろう。

様々なメディアが子どもにも浸透する状況においては、保育実践の捉え方の再考も迫られるかもしれない。筆者（第一著者）が継続的な参与観察をしている千葉県内A幼稚園¹では、示唆的な様子が度々見られる。2018年度の年中クラスでは、秋田新幹線「こまち」が好きな子どもたちがおり、子どもたちが何人も入れるような大きさの自作の「こまち」を保育室内につくり始めた。もとより、A幼稚園では豊富な素材を用いて製作物をつくりこむことを保育の基盤としているのだが、運転席を再現し、車内販売ができるようにし、新幹線らしい内装や外装にこだわるなど、今回も熱心な製作が続けられていた。興味深いのは、「こまち」をつくる子どもたちの中に、実物の「こまち」に乗った者はおそらくはいないということである²。筆者は熱心な製作活動を見て、「誰かが秋田にある祖父母の家に行く際に秋田新幹線に乗り、その経験が強く印象に残り、この活動が始まったのだろうか」と何となく感じていた。しかし実際はそうではなく、子どもたちは誰かがYouTubeにアップした「こまち」の動画に出会い³、それで「こまち」に憧れるようになり、何度も動画を見返しながら再現に腐心するようになったのだという。

八木（1992）は、子どものごっこ遊びは「現実を映す鏡」だと言っているが、このような実践を見てみると、子どもたちにとっての現実とはいかなるものなのか、再考しなければならないと感じられる⁴。YouTubeでしか見たことのない「こまち」は、子どもたちにとって虚構のものでしかないのだろうか。あるいは、タブレット端末に触れ続けることで、子どもたちの「生の実感」は希薄化してしまっているのだろうか。ならばなぜ、子どもたちは映像でしか見たことのないものにこれだけ関心を示し活動に没頭していくのか。

さて、いくつかの例を挙げながら、今を生きる子どもたちが生まれながらにしてICT機器に囲まれていることや、新たなメディアによって保育実践を捉える視座が更新される可能性があることを確認した。こうした観点は保育実践について考える上で避けてはとれない点であるはずだ。闇雲に新たなICT機器を導入すればよいということではないが、日進月歩にテクノロジーが発展していく現代においては、ICTの特徴、利点、課題といったものを保育者が適切に見極め、うまく保育の中に編み込めるようなノウハウを得ていくことが、以前にもまして求められることになるだろう。

2. 問題と研究方略

では、どのような方略ならば、保育実践における適切なICT活用を促していくことが

できるだろうか。小平 (2016) が示唆するように小学校以降における研究に比して保育における研究は少なかったものの、近年はタブレット端末やアプリに着目した研究が積極的に報告されてきている。たとえば、タブレット端末活用を促す事例集の作成 (堀田ら 2017)、幼児向けアプリの評価観点についての検討 (松山ら 2016)、幼稚園でのタブレット端末活用の過程を追った研究 (阿部 2015、坂巻・阿部 2018) などがある。これらは、保育実践に寄与する情報の提供や、先端的な保育実践についての報告を進める方略と言える。

他に、保育者志望の学生に対する教育のあり方に注目するという方略もありうる。堀田ら (2018) が言うように「保育現場では、テレビやゲーム、スマホやタブレット端末というだけで、遊びや学びを阻害する要因と捉える風潮が未だに強い」(p.205) のだとすると、現場の文化に馴染んでしまう前の段階での教育の重要性が理解される。また、ICT を活用した保育実践像の探究がまだ黎明期であるとする、ICT 活用の方法を学生らに伝えようと思っても適切な事例や教材を選びづらいという課題があるかもしれない。ICT という題材の性質上、紙のテキストだけでは実感を伴った学習がしづらいということもあるかもしれない。ICT について学んでもらうことが急務だとしても、諸々の事情により授業づくりをしづらい状況にあることが想定される。こうした状況においては、保育者志望の学生らに対する効果的な授業プログラムを探究しながら、その実際を具体的に記述し共有していくことには意義があると言えるだろう。

学生対象の授業づくりに関する先行研究には、次のようなものがある。片山ら (2017) は、大学での「幼児教育方法」および「保育者論」という授業において、情報機器の活用についての学生の思考を促すための授業を考案・実践している。ただし、片山らの報告では、「サイレント・ダイアログ」⁵ という手法を用いている特徴は確認できるものの、授業づくりよりも ICT に対する認識を明らかにすることに主眼がおかれているためか、教育内容や教材の検討についての記述がほとんどなく、授業の詳細が分からない。映像や資料を用いて授業が行われたことは記述されているが、それがどのようなものなのか、どのような意図でそれを選択したのかといったことが分からず、授業内容を批判的に検討したり再現したりすることは叶わない。もし、そうした点についての記述が加えられれば、授業づくり研究においては有益な情報となりうるだろう。

また、前述のとおり森田 (2008) は、具体的な実践までは行っていないものの、学生への調査をもとに ICT 活用の促進のために必要な教育内容について検討をしている。森田の考察の中にある、現代の学生であっても ICT を活用することに対して「不快もしくは苦手と感じる」(p.210) ことがあるという点に注目したい。学生に対して ICT に関する授業を行うことの意義が改めて理解されるとともに、「不快もしくは苦手」と感じられないようにするための工夫が必要だということも理解される。ただし、森田の調査は 2007 年に行われたものであり、想定されている ICT 機器は主にパソコンである。学生らが「不快もしくは苦手」と感じているのは、パソコンの操作に対するものだと思われる。他方、現在はスマートフォンやタブレット端末の活用に注目が集まっており、当時とは状況が異なっている。授業づくりの際には、ICT が「不快もしくは苦手」と感じられる可能性に留意しつつ、できるだけ現在の状況にあった題材を選ぶことにしたい。

3. 授業づくりの意図

ここからは、筆者らによる授業実践について記述をしていく。筆者（第一著者）が担当しているのは、保育者養成校（2年制の短期大学）における「教育方法」という授業である⁶。情報機器の活用についても取り扱うことになっている。履修時期は2年次後期であり、受講する学生らは全員、観察や実習の経験を有している。大多数が保育者志望である。

本稿では2018年度に行った授業実践について紹介する（2018年度は同授業を2クラス開講した）。本稿では全15回中の2回分の授業を取り上げる。その2回分を使い、教育用アプリ分析の授業を行うことにした。大まかに言えば、様々な教育用アプリを学生らが自分のスマートフォンにインストールし、保育（発想を広げるため、園内での実践だけでなく広く子どもとかかわる場面とした）での活用可能性について検討するという授業である。授業づくりの意図は次の5点である。

(1) ICT活用についての理解を促す題材として、アプリを取り上げる

世間に普及したスマートフォンやタブレット端末の大きな利点は、世界中で生み出される多種多様なアプリを自分で選んでインストールしていける所にある。一つの機器を買ってそれで終わりということではなく、常にカスタマイズをすることができる。パソコンでもソフトをインストールしていくことは可能だが、操作のしやすさはスマートフォンの方が優れている。また、カメラなどのシンプルな機能もスマートフォンの中ではアプリの1つとされており、アプリを例とすることで多様な機能を網羅することもできる。アプリ（およびそれを搭載するスマートフォン等）には、こうした扱いやすさや自由度がある。将来的にもアプリ開発への注目は続くと思われ、教育用の様々なアプリが登場してくることや、保育分野における研究が蓄積されていくことも期待される。

こうした状況では、特定の機器に注目するだけでなく、多種多様なアプリに触れることも重要ではないかと考えられる。最新の事情に触れやすく、現場での活用にもつながりやすいのではないかと考え、アプリを題材とすることにした。

(2) 乳幼児向けアプリに加え、多様なアプリや周辺的な内容についても取り上げる⁷

アプリを題材とするとしても、どういったアプリを取り上げるかということが課題となる。授業の趣旨からすると、第一には、乳幼児向けにつくられたアプリに触れる必要があるだろう。今回は、株式会社スマートエデュケーション⁸のアプリを取り上げることにした。同社は、リズム遊びができるアプリや、絵本を読めるアプリ、あるいは有名なキャラクターが登場するアプリなど、乳幼児の関心を惹くような創意工夫あるアプリを多数制作している。また、アプリを活用した現場での実践例や保育関係者へのインタビューなどをウェブサイト上に公開している。さらに、単にアプリをリリースするだけでなく、有識者らとともに「乳幼児の適切なスマートデバイス利用に関する「5つのポイント」」⁹を定めるなど、安心・安全にアプリで楽しんでもらうための啓発も行っている。アプリそれ自体に加え、活用方法の実際や啓発が必要な理由などの周辺的な側面についても取り上げることにする。

他方、乳幼児を主たる対象としていないアプリであっても、保育中に活用可能であったり、アプリをとおして教育のあり方について省察させられたりするようなアプリもある。

株式会社 LITALICO¹⁰ は、障害のある方の就労支援や学習支援などを行っている会社であるが、事業を行う中で生まれたアイデアをもとに、支援に役立つようなアプリの開発も行っている。たとえば、「えこみゅ」という発語に困難のある子を対象にしたアプリがある。アプリの中には、「いらない」「ちょうだい」「はい」「いいえ」など自分の意思を表明するためのカードがたくさんあり、それらを選択するとそのとおりの音声が発せられる。カードを組み合わせることで、コミュニケーションが助けられるというものだ。カードを自作することもできる。もともと支援の現場では、このようなカードが紙で作成されることはあるようなのだが、大量のカードをつくったり持ち運んだりするのは大変だという課題があった。また紙では音声は出ない。そうした課題を ICT によって乗り越えようとするアプリである。もしかしたら、保育の場面でもこうした発想によるアプリに助けられる子はいられるかもしれない。また、ICT によって教育の問題を解決しようとする試みがあるのだと知ること、ICT に対する認識がより豊かなものになるのではと期待される。予め保育用に用意されたアプリを享受するだけでなく、工夫次第で可能性が広がるのだと思考を巡らせてほしいという願いから、同社のアプリを取り上げることにする。

(3) 学生のスマートフォンに事前にアプリをインストールさせる

円滑な授業進行を重視するなら、分析対象のアプリを予めタブレット端末にインストールしておき、授業で学生に配布するというのも一案となろう。しかし、それでは与えられたものを言われるがまま操作するばかりであり、自ら ICT について調べ検討しようとする姿勢にはつながらない。多種多様なアプリが生み出される時代においては、自ら玉石をかき分けようとする姿勢が重要になると思われる。少なくとも、自らの手を動かし、教育用アプリを探し、インストールするという行為を 1 度は経験しておいてほしいと考えた。

授業の中では、アプリ分析を行う 1 週前にインストールするアプリの候補やインストール方法について連絡をした。技術的な面を言えば、実施校においてスマートフォンを学内の Wi-Fi につなげている学生が少なかつたため、通信量に配慮して事前のインストールを指示したという都合がある。教育的な面では、事前にインストールをすることで、特に指示を出さずとも事前にアプリの操作を試みる学生が少なからずいるのではないかと考えた。強制的な予習という拒否感を抱く学生もいるかもしれないが、せっかくインストールしたアプリであればそれがどんなアプリかと気になる学生も多かろう。特に指示を出さずとも、むしろ指示を出していないからこそ気になってアプリを触り、アプリについて何かを言いたいという気持ちで次回の授業を迎えることになる。森田 (2008) の言う「不快もしくは苦手と感じる」状況を避けるためにも、ICT に触れる経験を楽しめるものにしたく、このような工夫を取り入れた。

なお、今回取り上げたのは、すべて基本操作は無料のアプリである。

(4) アプリの分析はゆるやかな共同作業として行う

片山ら (2017) では「サイレント・ダイアログ」という、ワークシートを回覧し、静寂の中、紙上での対話を深めるという手法が用いられていたが、本授業ではワークシートは活用するものの静寂はできるだけ排除し、複数人で話しながらアプリの分析を行うよう指示することにした。

理由は、(3)と同じく森田(2008)の課題を避けるためである。保育でのICT活用が生真面目なものだと捉えられることは避けたい。固い表情の保育者が、教育効果があるからと子どもにアプリ操作を強制するような光景は滑稽であろう。保育をより楽しく、軽やかで、保育者の想像を超えるような営みとするために、ICTは活用されるべきではないだろうか。そのためにも、楽しげなアイデアが持ち寄られ、ポジティブな気持ちでICT活用が検討されてほしいと願う。こうした考えにもとづき、授業中でも皆で声を出しながら議論していくスタイルを推奨することにした。

(5) 15回の授業全体をとおしてスマートフォン等を活用させる

スマートフォンが登場する以前であれば、ICTを活用しようと思ってもパソコンやビデオカメラや実物投影機など特定の機器が必要であった。また、そうした機器を日常的に持ち歩く学生も少なかった。

一方で、学生が手にしているスマートフォンは、LINEやゲーム、SNSをする機械であるだけでなく、教育や保育にも活用できる高機能のコンピュータである。特別な機器を用意しなくとも自らICT活用のために動けるのだという認識や、スマートフォン等が教育や保育にも使える道具なのだという認識をもってほしいという思いから、教育用アプリ分析を行う2回以外にも、授業中にスマートフォンを活用する場面を設定することにした。

基本的には、毎回、授業の最後にスマートフォン経由でコメントを提出してもらうことにした¹¹。授業前にGoogle Formsを用いてアンケート回答フォームを作成しておき、そのフォームにアクセスするためのQRコードも作成しておく。授業時はそのQRコードを配布する。学生らはスマートフォンを取り出し、QRコードを読み、アンケートに回答することになる。アンケート内容は毎回のテーマに応じて作成する。学生の様子を見て、授業時にアンケートの内容を修正することも可能である。提出された回答はクラウドに集約される。興味深い回答は次回授業冒頭で紹介することもある。その他にも、必要に応じて写真撮影やウェブ検索のためにスマートフォンを活用させた。

こうした作業を毎回恒例のものとするにより、スマートフォン(およびタブレット端末)が教育や保育にも活用できるものだという感覚をもつことができるのではないかと考えた。また、スマートフォンの操作やQRコードの読み取りになれていない者がいた場合、自然と周囲の者と教え合いになることも想定され、そうした経験は教育用アプリ分析を共同作業として行う際の下地になるとも考えた。

4. 授業の流れ

以上の意図をもちながら、2回の授業を構成・実施した。授業の概要を表1に示す。教育用アプリの分析を主たる活動とし、話し合いをとおして他者の意見も聞きながら、ICT活用についての考えを自分なりに深めてもらうことを目指した。「分析」という言い方をしているのは、おもしろければ何でも良いという理解をするのではなく、ICTと保育の関係について批判的に検討してほしいという意図からである。

表 1 授業の概要

授業名	教育方法
実施日	2018 年 11 月 26 日（1 コマ目）、12 月 3 日（2 コマ目）
開講時限	3 限、4 限（同一の内容を実施）
出席者数	履修登録者数：計 141 名 公欠・病欠などの都合により、11 月 26 日：3・4 限あわせて 136 名、12 月 3 日：3・4 限あわせて 136 名が出席
対象	2 年制短期大学の 2 年生（多くが保育者志望であり、全員が観察・実習の経験あり）

また、詳しい授業の流れは以下のとおりである。学生の様子も書き加える。

【1 コマ目】

<前半>

- ・本時のテーマが ICT であることを伝えた。「ICT という言葉を聞いたことがありますか？」と質問したところ、ほとんどの者が聞いたことがないという様子であったため、語の意味を丁寧に説明した上で、ICT 活用の例を身近なもの（その場で使っているパソコン、スマートフォン、スマートフォンのカメラ、教室に置いてあった実物投影機など）を用いて説明した。また、保育の現場でも少しずつ ICT 活用が進んでいることについて、幼稚園教育要領解説「(6) 情報機器の活用」(p.108) の記述を紹介した上で、A 幼稚園で幼児がタブレット端末を用いて写真や動画の撮影を行っている様子を見せた。
- ・保育での ICT 活用の現状をより詳しく伝えるために、YouTube に公開されている関連動画をその場でひらいて見せた。本稿執筆段階で削除されたものもあるが、企業による園務効率化のためのサービス、タブレット端末を用いた保育実践の例などを視聴した。

<後半>

- ・先に紹介した身近な例の他、最近では多種多様なアプリが生み出されており、中には教育や保育でも活用できるアプリがあることを説明した。
- ・「まずは自分たちで触って、どのように活用できるか考えてみよう」と呼びかけ、株式会社 LITALICO について簡単な紹介をした後、予めスマートフォンにインストールしてもらっていたアプリの分析を始めた。インストールしてもらっていたアプリは、「はみがき勇者」「じかんコイン」「おかね星人」「やることカード」「どうぶつまるカード」「こえキャッチ」「ねずみタイマー」「えこみゅ」の 8 つである。様子を見ると、ほとんどの学生が事前にインストールを済ませており、多少の操作もしていたようである（授業前に数名が集まって盛り上がる様子も見られた）。若干名、インストールをしていなかった学生もいたが、その場でインストールをして事なきを得た。また、ワークシートも配布した。各アプリに対して「保育、子育て、発達障害のある子のサポートなど、どんな場面でどんな風に使えるそう？」「ここが修正されたらもっと良い！ もっとこういう機能がほしい！」「お気に入り度（A～D）」という項目があり、これらの項目を参考に感じたことをメモしながら触るよう指示した。複数人で話しながらアプリを触るようにも指示した。全体としては、楽しげに話しながら操作する様子が見られた。それでいて、ワークシートへのメモを熱心にとっていたり、活用方法について意見を言い合ったりする様子も見られた。
- ・ひととおりアプリを触ったであろう頃を見計らい分析の作業を止め、アプリ開発者自身

が開発意図などをまとめたスライド¹²を見せながら、アプリについてはICTの可能性について話をしたり、学生と対話をしたりした。

- ・ Google Forms および QR コードを用い作成した本時の授業を終えてのアンケートへの回答を依頼しつつ、次回は株式会社スマートエデュケーションのアプリをインストールしておいてほしいことを伝えた。同社のアプリは数が多いため、興味のあるものを自ら選び、最低でも3つ以上インストールしておいてほしいと伝えた。また、幼稚園教育要領解説の該当部分を読んでおくことを事後学習として提示した。

【2 コマ目】

＜前半＞

- ・ 冒頭に事務連絡をした後、今回は前回の続きであることを伝え、株式会社スマートエデュケーションについて簡単な説明をし、今回の例の方がより直接的に乳幼児向けのアプリであることを確認し、すぐに分析の作業に入った。前回同様ワークシート（「発達障害のある子のサポート」という文言は削除してある）を配布した。インストール状況や作業の様子は、前回と大差ないと感じられた。
- ・ ひととおりアプリを触ったであろう頃を見計らい分析の作業を止め、ウェブに公開されている実践例を閲覧した。また、同社が無償公開している「おやことスマホ 楽しく利用する5つのポイント」のチラシを配り、内容について確認した。

＜後半＞

- ・ 2回の授業のまとめとして、コメントを紙に書かせた。課題は「前回と今回のアプリ分析をとおして、保育におけるICT活用（タブレットやアプリの活用など）について、自分の考えを書いてください」というものである。この作業は個人で静かに行わせた。また本コメントの取り扱いについて説明をした。
- ・ Google Forms および QR コードを用い作成した本時の授業を終えてのアンケートへの回答を依頼した。また再度、幼稚園教育要領解説の該当部分を読んでおくことを事後学習として提示した。

5. 授業の結果

学生が最後に執筆したコメントから、学生らの認識について考察をしてみたい¹³。記述を取り上げる参考とするため、136名分の記述（39,307字）をデータ化し、ユーザーローカル テキストマイニングツール（<https://textmining.userlocal.jp/>）で分析をした。データ化の際、誤字であることが明確な部分や表記のゆれについて、意味を変えないと筆者が判断する範囲において修正をしている。

学生らがどういう内容を語ろうとしているのかを探るため、「形容詞」に注目してみたい¹⁴。たとえば、「形容詞」の出現頻度上位は「良い」（221）、「多い」（56）、「楽しい」（55）、「難しい」（47）、「悪い」（21）となっている。また、「名詞 - 形容詞」の係り受け解析の上位は、「活用 - 良い」（19）、「導入 - 難しい」（8）、「子ども - 良い」（6）、「アプリ - 多い」（5）、「保育 - 難しい」（5）、「活用 - 難しい」（3）である。「良い」などのポジティブな語と、「難しい」などのネガティブな語が混在しているが、具体的にはどのような記述があるか。

まず、「良い」を含む記述をいくつか取り上げてみてみよう。

アプリを使ったりするのは、時間をしっかり決めて行ったり親子でルールを決めたらとても良い教材になると思う。前回の会社のアプリはなにか活動しながらの補助として使うものが多かったように感じた(〇〇の活動を続けたり、やめたりするように出来るためのアプリなど)。今回のスマートエデュケーションという会社のアプリはそれ自体で遊べると思った。どちらも様々な利点があり、また、それを通じたコミュニケーションも出来ると私は思った。保育園で取り入れるときには、保育者がどういう目的のもと作られたのかを分からずに子どもに与えてしまうと、子どもがただ遊んでいるだけになってしまうので気をつけたい。

私は、アプリ分析を実際に授業で行ってみて、使えるアプリは保育に活用していきたいと思いました。子どもがタブレットやスマホを使ってゲームをしたりすることにあまり良い印象がありませんでしたが、子ども専用のアプリを知って、考えが変わりました。アプリを行うことで、子どもたちにとってプラスになることもあると感じました。アプリを使うことで、楽しくないことや、やりたくないことも、ゲームなので楽しみながら行うことが出来ると思いました。一方で、アプリの使いすぎは、視力の低下や体力低下に繋がるので、時間を決めて活用することが大切だと思いました。

「良い」を含む記述の多くは、当然ながらアプリ活用について肯定的なものである。また上の記述のように、無批判にアプリを賛美するのではなく、導入の際に留意すべき点にも記述が及んでいるものが多い。

次に、「難しい」を含む記述を見てみよう。

私は保育の現場で積極的に活用したいと思うけど、導入と終わりが難しいと思った。保育の場で ICT を活用するのは良いと思うけど、ゲームに夢中になったり、家でやりたいと思うようになると、保護者からクレームを言われてしまいそうだった。また親からも一緒にゲームをするのではなく子どもにスマホを渡して終わりになってしまう親もいると思った。上手く活用するには、保育者と保護者で話し合わないといけないと感じた。

タブレットやアプリを活用することについて、子育てでは母親の育児負担を軽減することが出来たり、教育的な部分で使用出来る部分があるとアプリ分析を通して感じたため、子どもの生活習慣が乱れないようにするなどの注意点はありますが家庭で積極的に活用していきたいと考える。しかし、保育においては導入は難しいと考える。理由は一斉保育をする際に個人の活動が多くなると感じたからだ。実際に自分自身がアプリを体験して保育者の言葉などが全体におおるかと思うとそうではないなと感じた。そのため私は育児における ICT の活用は積極的に行いたいけど保育における ICT の活用は難しいと考える。

「難しい」を含む記述の多くは、やはり保育への導入に否定的なものである。それでも、徹頭徹尾アプリのことを否定するような記述はほとんど見られなかった。上記の例においても、否定的な内容だけでなく、うまく活用するには保護者との話し合いが必要だという内容や、家庭でなら活用できるという内容が書き込まれている。結果として否定的な考えをもったとしても、アプリの特徴をよく調べ、活用の場面を具体的に想像したことがうかがえる。

コメント全体を見渡すと、上記の例のように、肯定的な意見の場合は使用上の留意点にも言及していたり、否定的な意見の場合は導入の可能性についても言及していたり、肯定・否定の両面に目を向けたような記述が多かった。直感的に「好き・嫌い」の思いを記述したのではなく、批判的な検討を行った上でコメントが記述されたことがうかがえる。本授業においては、アプリやICT利用の可能性を自分なりに検討できるようになってほしいと考えていた。両面に目が向けられた記述はともすると立場がはっきりしない曖昧な記述に思われるかもしれないが、批判的検討の結果として肯定的に受け止めたいと考える。

また、保育者自らが批判的な検討をしていくことが重要だと主張する次のような記述もあった。

保育者が子どもにとってどのアプリが1番良いのか見わけることが必要だと感じた。

その子どものためになるアプリもあれば、逆に悪影響のアプリもあると思う。使う子どもにあってるか、ためになるかをよく考えてから使うべきだと思う。

このような批判的な思考を続けながら、今後もアプリひいてはICT利用の可能性について自分なりに検討して行ってほしいと考える。

6. 成果と課題

限られたデータからの考察であるが、学生らが授業中に熱心に語り合いながらアプリを分析していたことも加味すると、ICT利用についての思考をうながす授業として本授業は概ね妥当なプログラムとなっていたのではないかと解される。ただし、教材の選定や分析の方法などに関しては、他にも様々な可能性があるだろう。今回の実践記録をもとに、内容を少しずつ更新していきたい。また、授業の効果検証については、より厳密な方法を用いることが望ましい。継続的に研究を行いたい。

最後に、今後特に検討しなければならないと考えている点を明記しておく。ICTをテーマとした授業を受け、学生らが賛否両論の多様な考えを示すことは、すでに片山ら(2017)でも示されていることである。だとすると、本授業(ひいてはICTを題材とした他の様々な授業)の効果というものがどこまで認められるのかが疑わしくなってくる。もしかしたら、学生らの記述能力やこれまでの作文経験によって自ずとそうした記述が量産されるという可能性もあるかもしれない。こうした課題に対して、次のような対応を考えていく

「難しい」を含む記述の多くは、やはり保育への導入に否定的なものである。それでも、徹頭徹尾アプリのことを否定するような記述はほとんど見られなかった。上記の例においても、否定的な内容だけでなく、うまく活用するには保護者との話し合いが必要だという内容や、家庭でなら活用できるという内容が書き込まれている。結果として否定的な考えをもったとしても、アプリの特徴をよく調べ、活用の場面を具体的に想像したことがうかがえる。

コメント全体を見渡すと、上記の例のように、肯定的な意見の場合は使用上の留意点にも言及していたり、否定的な意見の場合は導入の可能性についても言及していたり、肯定・否定の両面に目を向けたような記述が多かった。直感的に「好き・嫌い」の思いを記述したのではなく、批判的な検討を行った上でコメントが記述されたことがうかがえる。本授業においては、アプリやICT利用の可能性を自分なりに検討できるようになってほしいと考えていた。両面に目が向けられた記述はともすると立場がはっきりしない曖昧な記述に思われるかもしれないが、批判的検討の結果として肯定的に受け止めたいと考える。

また、保育者自らが批判的な検討をしていくことが重要だと主張する次のような記述もあった。

保育者が子どもにとってどのアプリが1番良いのか見わけることが必要だと感じた。

その子どものためになるアプリもあれば、逆に悪影響のアプリもあると思う。使う子どもにあってるか、ためになるかをよく考えてから使うべきだと思う。

このような批判的な思考を続けながら、今後もアプリひいてはICT利用の可能性について自分なりに検討して行ってほしいと考える。

6. 成果と課題

限られたデータからの考察であるが、学生らが授業中に熱心に語り合いながらアプリを分析していたことも加味すると、ICT利用についての思考をうながす授業として本授業は概ね妥当なプログラムとなっていたのではないかと解される。ただし、教材の選定や分析の方法などに関しては、他にも様々な可能性があるだろう。今回の実践記録をもとに、内容を少しずつ更新していきたい。また、授業の効果検証については、より厳密な方法を用いることが望ましい。継続的に研究を行いたい。

最後に、今後特に検討しなければならないと考えている点を明記しておく。ICTをテーマとした授業を受け、学生らが賛否両論の多様な考えを示すことは、すでに片山ら(2017)でも示されていることである。だとすると、本授業(ひいてはICTを題材とした他の様々な授業)の効果というものがある程度まで認められるのが疑わしくなってくる。もしかしたら、学生らの記述能力やこれまでの作文経験によって自ずとそうした記述が量産されるという可能性もあるかもしれない。こうした課題に対して、次のような対応を考えていく

い。

- (1) 記述による評価だけでなくパフォーマンスによる評価を用いることも検討する。
- (2) 根本的に先行実践とは異なった内容の授業を構想する。たとえば、ICT 活用に長けた実務家とのワークショップ形式の授業や、より真正な課題に向かえるようにすることをねらいとした、実習園やアプリ開発者などとの連携授業などの可能性を検討していきたいと考えている。

参考文献

- 阿部学 (2015) 「保育実践へのタブレット PC 導入期の記録—「アプリの時間」以外での活用—」社会とつながる学校教育に関する研究 (3) (千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書、第 293 集)、pp.9-15
- 阿部学 (2017) 『子どもの「遊びこむ」姿を求めて—保育実践を支えるリアリティとファンタジーの多層構造—』白桃書房
- 片山美香・岡崎順子・西山修・横松友義・梶谷信之・高橋敏之 (2017) 「幼児教育における情報機器活用への保育者志望学生の認知」岡山大学大学院教育学研究科研究集録、166、pp.21-30
- 小平さち子 (2016) 「幼児教育におけるメディアの可能性を考える～2015 年度 幼稚園におけるメディア利用と意識に関する調査を中心に～」放送研究と調査、66 (7)、NHK 放送文化研究所、pp.14-37
- 小林紀子 (2006) 『メディア時代の子どもと保育』フレーベル館
- 坂巻綾香・阿部学 (2018) 「タブレット端末の導入による保育実践の質の変容—ある幼稚園における科学探究的な活動を例にして—」日本教育工学会第 34 回全国大会講演論文集、pp. 541-542
- ベネッセ教育総合研究所 (2017) 「第 2 回 乳幼児の親子のメディア活用調査 速報版 [2017 年]」<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5208> (2019 年 1 月 1 日確認)
- 堀田博史・佐藤朝美・松河秀哉・森田健宏・中村恵・松山由美子・深見俊崇 (2017) 「保育でのタブレット端末活用を促す事例集の作成」日本保育学会第 70 回大会発表要旨集、p.404
- 堀田博史・佐藤朝美・松山由美子 (2018) 「幼児教育におけるメディアの効果的な活用法を探る」日本保育学会第 71 回大会発表要旨集、p.205
- 松山由美子・堀田博史・佐藤朝美・奥林泰一郎・松河秀哉・中村恵・森田健宏・深見俊崇 (2016) 「保育現場での活用を想定した幼児向けアプリの評価観点の検討」日本教育工学会論文誌、40 (Suppl.)、pp.117-120
- 森田健宏 「幼児教育現場において ICT 利用を促進するための教員養成課程における教育内容に関する検討」日本教育工学会論文誌、32 (2)、pp.205-213
- 八木紘一郎編 (1992) 『ごっこ遊びの探究—生活保育の創造をめざして—』新読書社

1 A 幼稚園の保育実践は個性的なものであり、A 幼稚園の実践の構造に焦点を当てた研究や、A 幼稚園の実践をもとに教育・保育のあり方を捉えなおそうとする研究などが蓄積されてきている。説明には紙幅を要するため、

詳しくは阿部（2017）などを参照されたい。なお、A 幼稚園という名称は仮名である。

2 担任保育者から聞いた話である。

3 A 幼稚園では、阿部（2015）の研究などをきっかけに、現在では子どもたちが自由に iPad を使えるようになっている。

4 保育実践における現実と虚構の関係については、八木（1992）をアップデートする方向で阿部（2017）により詳しく検討されているが、そこではここで例にしたような新しいメディアの影響は踏まえられていない。この論点については、本稿ではなく別の場所で詳しく検討することにしたい。

5 片山ら（2017）では、「1枚のワークシートを順次回覧し記述しながら、紙上での対話を通して思考を深める授業手法」（p.22）と説明されている。

6 非常勤としてこの授業のみを担当している。なお、内容等の検討は筆者ら2人で行った

7 便宜上、本稿では「教育アプリ」と呼ぶことにする。

8 株式会社スマートエデュケーション <http://www.smarteducation.jp/>（2019年1月1日確認）

同社のアプリについては次のページを参照のこと。 <http://kdmode.jp/>（2019年1月1日確認）

9 次のページに掲載されている。 <http://smarteducation.jp/principles.html>（2019年1月1日確認）

10 株式会社 LITALICO <http://litalico.co.jp/>（2019年1月1日確認）

同社のアプリについては次のページを参照のこと。 <https://app.litalico.com/jp.html>（2019年1月1日確認）

11 2018年度の受講生は全員がスマートフォンを所持していた。ただし、時折、通信制限となってしまう者もあり、その場合は紙で提出させた。

12 株式会社 LITALICO でアプリ開発を担当していた岸田崇志氏の講演資料が公開されている。 <https://www.slideshare.net/chipa34/by-82305083>（2019年1月1日確認）

13 当初は実践について記述する予定がなかったため、データに乏しく効果検証が曖昧になってしまっていることを断っておきたい。

13 「名詞」では「アプリ」「子ども」「活用」、「動詞」では「思う」「出来る」「使う」など、記述に含まれることが容易に想像できる語が上位であったため、「形容詞」に注目することにした。